

「門脈圧亢進症の病理 肝内血管系の変化を中心に」

久留米大学名誉教授 中島 敏郎 編集
久留米大学助教授 鹿毛 政義

科学技術会議

森 巨

久しぶりにイギリスのケンブリッジを訪ねた。雨の日であった。私にとって師匠とも言うべき R.R.A. クームス先生は、2度の手術に耐え抜いてこられたとは思えないほどの元気で暖かく迎えてくださり、ご自身手作りの昼飯を御馳走してくださいました。私の近況報告を優しいまなざしで聞いておられた先生は、やがて書棚から1冊の本を取り出してこれ、"これは、僕が持っているよりも君が持っていたほうが良い"と、短い言葉と共にサインを認めて私に下さった。今では貴重な、シュワルツマンの初版本であった。先生の、その方面における蔵書は有名であり、この本にも先生のお名前と共に、一連の通し番号が打ってあった。したがってこれは、先生の書架の中で永久欠番となることを意味している。そしてこんなことを言われた。"僕が君に伝えることができたのは、今から考えると大変古典的な事柄ばかりだった。君もその影響を受けてか、まことに古典的な仕事をしたものだね。しかし今や、いわゆる近代解析ばかりでは物事は解決しないことが明らかになってきたようだ。もう一度古典に戻り、その中に秘められている総合の精神を大切にしないといけない。このごろ僕は、機会あるごとにこんなことを言っているんだよ。"

それから2か月、梅雨のころになって医学書院から、中島敏郎先生の著書「門脈圧亢進症の病理—肝内血

管系の変化を中心に」が送られてきた。拝見して、一番先に頭に浮かんだのが上に述べたクームス先生の言葉であった。正しく、形態学におけるこの1冊の中に、クームス先生が免疫学を通じて体験され、感じられた思いそのものが込められているように感じたからである。

題名に示されているごとく、ここに記載されている内容は門脈圧亢進症に関する病理形態学が中心であり、冒頭15頁に及ぶカラー図譜をはじめとする豊富な肝臓の肉眼、ならびに顕微鏡写真がまず注目される。また、副題にみるとおり、肝血管系の変化が最大の焦点であるために、X線を用いた血管造影写真を多数見る。更に何か所か、理解を容易にするための線画、模式図が散見され、とにかく、極めてオーソドックスな、在来の方法で視覚に訴えつつ病変をありのままに示す書物、というのが最初の印象である。

しかしもちろん、この本は単なる図譜ではない。各項目にわたって"研究の歴史" "分類" "臨床所見" "病因" "疫学" "病理形態学" など、いろいろな要点がそれぞれの必要に応じで記載され、かつそれらの締めくくりにような形で、しかし与えられた場所としては各項目の最初に、"ポイント・メモ"なる総括があり、知識の整理を助けている。また、これは各項目の最後に、参考文献が一通り揃えられているのも、更なる勉強をしようとする人々にとっては助け

になるであろう。

かくして本書の中には、序文の中にも書かれているように、肝硬変のみならず非硬変性門脈圧亢進を来す諸種の疾患が網羅され、それらの実像を比較検討する努力が払われている。久留米大学医学部病理学教室を中心に集められた材料の中には、比較的まれな、学問上貴重な症例も含まれており、このコレクション自体が1つの価値あるものとなっている点も高く評価されねばならないであろう。このように優れた材料を、質の良い写真と共に残すことは、なかなか容易なことではない。これこそ不断の努力の積み重ねであって、日常、いかにきちんとした仕事をしておられたかをここにうかがい知ることができる。

およそノーベル賞にはほど遠い、古典的手法に徹した書物である。にもかかわらず、教科書としても、研究の成果としても、このようなものこそ本塁打ではないにしても確実に走者を塁に進め、得点を重ね、チームを勝利に導く極めて有効な、価値の高いものであろう。先にクームス先生の言葉を引用させていただいたゆえんである。中島先生を中心とする御一門の、長年にわたる精進と、地道なお仕事の成果に心からの敬意を表したい。

● B5 頁212 写真180 カラー写真
52 1996 定価12,360円(税込)
〒400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)